宮城から、伝えたいこと。

Baton

つながれ、どこまでも

バトン
VOL.
02
FROM MIYAGI

特集

語り継ぐということ

きて・みて in 岩沼市 山元町

□岩沼市千年希望の丘 交流センター
□山元町防災拠点・山下地域交流センター（つばめの杜ひだまりホール）
□山元町震災遺構中浜小学校

machico防災部といっしょ「未来へつなぐ中高生語り部」

あしたのクリエイティブ せんだい3・11メモリアル交流館のハンドブック『海辺のふるさと』

バトンとは　世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

【特集】災害とことば

語り継ぐということ

記憶をたぐり寄せるとき、不安を打ち明けるとき、
そこには〈ことば〉があります。
大災害という非日常を経験した私たちは
どんなことばを得て、どう伝えてきたか――。
ことばはバトン。ここにいる誰かに、未来の誰かへ。

あのころ、被災地の惨状を形容して「ことばを失う」「ことばもない」という〈ことば〉が巷にあふれました。事実、あまりの経験ゆえに誰かに話すことも友人と会うこともできなかった人もいたことでしょう。幼なすぎて見たことや感じたことを伝える術すら持たなかった人もいたはずです。そんな失われたことば、語られなかったことばは、時計の針が進むにつれて少しずつ形を持ち始め、深みを増しながら新たなことばを引き寄せます。

震災体験の執筆や語り継ぎは早い時期から始まりました。それを暮らしのなかの「民話」として育てる人がいます。また、湧き上がる思いを俳句や短歌など定型のリズムに乗せ、あるいはほとばしるように詩に綴った人がいます。そしてようやく小説という手段にたどり着き、おずおずと物語を紡ぎ始めた人もいます。そのほか、美術や音楽、映像といった芸術に昇華させる動きも展開されています。

この11年半、私たちは、ことばの意味は一つではないと感じてきました。「悲しい」「悔しい」「勇気をもらった」「前を向いて」……。一見ありふれたどのフレーズも、その人その人の境遇、原風景、家族の歴史など、計り知れない背景を宿しているのです。

そして、些細な出来事も、後に大切な教訓になることがあります。それをさまざまに伝え続け、考え続けることが、防災へとつながるはずです。

ここでは、自らのことばを探し続け、あるいは送り届けてきた人たちにお話をお聞きします。

取材・文
千葉由香（荒蝦夷）
Baton編集部

民話――小野和子 p03
一人ひとりの体験が
語り継がれて次の民話へ

短歌――梶原さい子 p05
〈そのとき〉
生まれた三十一文字は
後の誰かの
心情に寄り添う

俳句――高野ムツオ p04
〈沈黙の世界〉が
作者と読み手をつなぐ

文学――仙台短編文学賞 p06
私たち個人が紡ぐ
物語の受け皿としての
仙台短編文学賞

山元町震災遺構中浜小学校のそばに掲げられた「黄色いハンカチ」。
国内外から寄せられた応援のことば、それに対する感謝のことばが綴られている。

民話

一人ひとりの体験が語り継がれて次の民話へ

民話採訪者　小野和子

震災後、小野さんが編集に携わった本。津波で失われたまちを取り戻すために書き記した『閖上―津波に消えた町のむかしの暮らし』（写真左）。福島県双葉町に住んでいた方々44名の転居の足跡を綴った『双葉町を襲った放射能から逃れて―わたしたちの証言集』（写真右）。

「声」で共有する

私たちは「みやぎ民話の学校」という、民話の語り手から直接に語りを聞く場をつくってきました。民話とともにその方の暮らしぶりや日常の出来事などのお話もしてもらいながら、声で伝えることの価値をつなぐ場をつくっていました。

東日本大震災が起きた年も、7月に民話の学校を開く予定で準備をしていたんです。その時偶然にも、海辺のまちにお住まいの語り手を6名お呼びし、お話を聞こうと企画していました。ちょうどそのお声がけをしていた最中、大地震が起きました。語り手のみなさんに連絡がつかず、消息がわからなくて、あちこちの避難所を泣きながら探し歩きました。

幸い、それぞれの場所にご無事でいらっしゃいました。福島の新地、宮城の山元、閖上、塩竈、志津川と、みなさん津波の被害に遭われて家もご家族も失っておられました。私は、その壮絶な体験をしたみなさんに「あの日を語ってくださいませんか」と声をかけたんです。周りからは残酷ではないかという声も上がりました。でも私は、海に流されて亡くなってしまった方々にも聞いてもらいたいと思ったんです。語り手のみなさんも快く引き受けてくださいました。

震災から5か月後、海が見渡せる『南三陸ホテル観洋』で民話の学校を開きました。

沿岸部で被災された方の生の声、しかも民話の語り手の方々の話は、会場を一体とさせるものでした。ご自身が体験したことを、ご自身も泣きながら、聞く人を笑わせたり、時には泣かせたりしながら語ってくださった。あのときの光景は、言葉に尽くせません。そのときに語られた話は『大地震　大津波を語り継ぐために―声なきものの声を聴き・形なきものの形を刻む―』（上写真・中央）という本に記録を残しました。

特別ではないからこそ

民話は、特別な人が語る特別な話ではなく、日常のつらい現実を生き抜いていくための明るいものの結晶だったと思うんです。つらい話に笑いを添えて乗り越えてきたのだと思います。

震災の経験を語るというのは民話と少し違うかもしれませんが、いろいろな方のいろいろな体験一つ一つが集大成となって、時間とともに民話となり語り継がれていくのではないかと思っています。

小野和子／民話採訪者。1934年岐阜県生まれ、1958年より宮城県仙台市に在住。1970年より宮城県内の民話の採訪を手がける。1975年、仲間と共に「みやぎ民話の会」を結成し、採訪の成果をこれまでに700冊に及ぶ資料集と『みやぎ民話の会叢書』13 集として刊行。せんだいメディアテークにて「民話声の図書室」として民話語りの映像や音声の視聴・貸し出しを行っている。著書に『あいたくて ききたくて 旅にでる』がある。

俳句

〈沈黙の世界〉が作者と読み手をつなぐ

俳人　高野ムツオ

高野さんが会長を務める宮城県俳句協会が2013年、2016年、2021年と3回にわたり発行してきた『東日本大震災句集　わたしの一句』。震災を機にはじめて俳句をつくった方など国内外から多数寄せられた句は3巻合わせて3218句にのぼる。

十七音だからこそ広がる表現

俳句は五七五とわずか十七音。それは自然や事象に対するあいさつであり、一瞬の場面を提示する静止画像のようなものです。叙述も説明も盛り込めないけれども、そのときの作者のありようが把握できます。できごとや思いはことばによって形となり、固定化されるのです。

十七音の背後には深い沈黙が広がります。鑑賞する側はその沈黙に自分なりの世界を重ね合わせ、作者と何かしら共通する体験や想像にたどり着いたときに感動を覚えます。読み方は普遍的であると同時に、非常に個別的です。

震災後、被災地だけでなく全国の俳人や俳句愛好者が震災を詠み、すぐれた作品を多数生み出しました。理由の一つは、未曾有の大地震だったことに加え、原発事故の恐怖により広範囲にわたる人が当事者性を抱いたから。そして何よりいくら語っても語り尽くせない体験を投影するのには、逆に短い言葉に思いを込める俳句という表現形式がふさわしかったからでしょう。

自分の句から力を得る

あの3月11日、私は仙台駅の地下にいました。最初に感じたのがものすごい音、次に揺れです。その後、多賀城の自宅まで13キロ歩いたのですが、不埒にもずっと俳句をつくり続けていました。小学生のころから俳句に親しんだ私にとって俳句は生活そのもの。五七五のリズムが体に刻まれています。不安のなか、句作が支えとなり、つくった俳句に励まされました。

こんなこともありました。震災1か月後、津波が遡上した砂押川を自宅のベランダから眺めると、黒い泥のなかにキラキラ光るものが見えました。蘆の芽に違いないと思って詠んだのが、〈泥かぶるたびに角組み光る蘆〉。「角組む蘆」という季語で震災の春を表現したつもりでしたが、「たびに」は長い時間を示唆する語でもあります。太古から何度も津波に遭ったであろう地で、そのつど蘆は芽吹いた、それは人間の再生を意味し、何度も立ち上がってきた人々の姿にも重なるのではないか……。作品発表後にさまざまな反応を得たことで、意識していなかったそのような自らの思いに気づき、この句の意味も深まったというわけです。

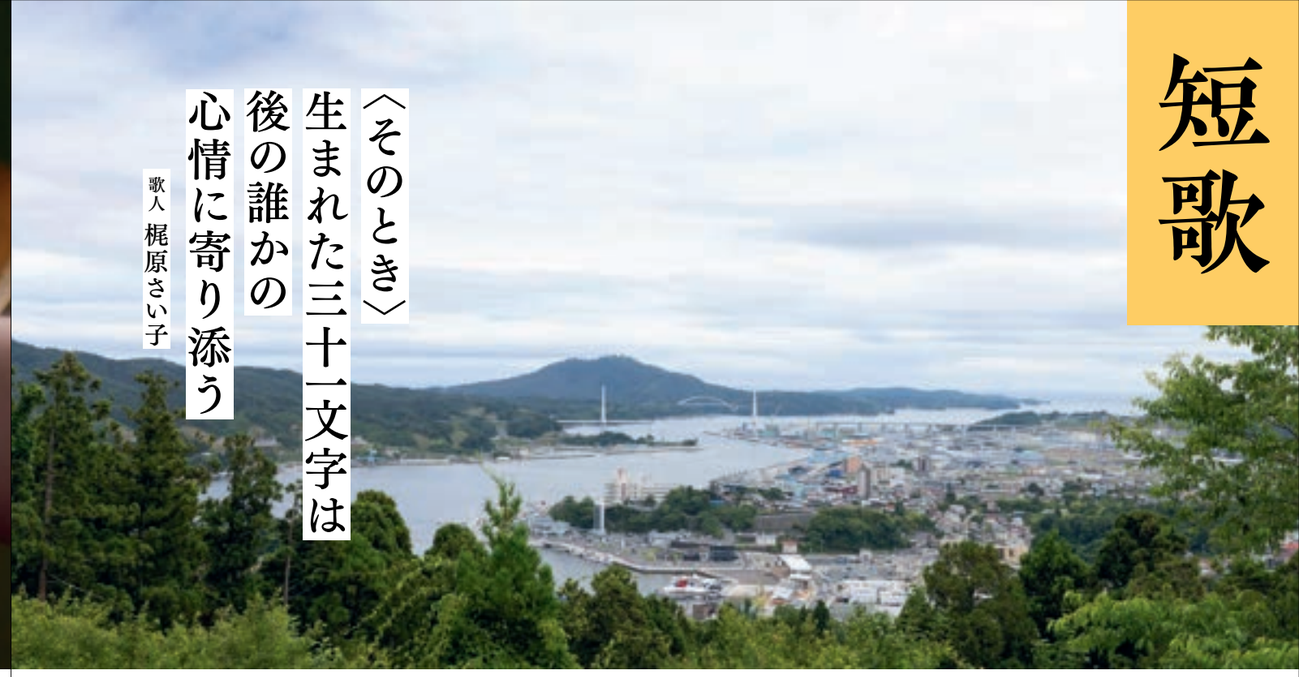
震災を境にものごとのとらえ方は大きく変わりました。桜や打上花火から人の生死を連想することも多くなりました。私たちの現在は亡き人によって支えられているという意識をもって俳句を発信していこうという思いが強まっています。

高野ムツオ／1947年、宮城県栗原市生まれ。俳人。俳誌「小熊座」主宰。阿部みどり女、金子兜太、佐藤鬼房の指導を受ける。第1句集『陽炎の家』（牧羊社）で第24回海程賞を、震災詠を含む第5句集『萬の翅』（KADOKAWA）により第65回読売文学賞（詩歌俳句賞）と第48回蛇笏賞を受賞。第44回現代俳句協会賞、第70回（2020年度）河北文化賞受賞。蛇笏賞選考委員、河北俳壇選者。

短歌

〈そのとき〉生まれた三十一文字は後の誰かの心情に寄り添う

歌人 梶原さい子



梶原さんの出身地である気仙沼市。津波による甚大な被害を受け、多くの人が家族や自宅を失った。
現在は復興が進み、防災機能を備えたまちとして新しい魅力を発信している。

〈からだ〉の裡から歌が生まれる

私の生家は気仙沼市の唐桑半島、宿浦漁港を見下ろす早馬神社です。集落62軒のうち、津波で流されるなどして残ったのは8軒だけ。神社も被害を受けましたが、家族は無事でした。

震災後、最初の歌が生まれたのは生家で片付けをしているとき。暗い台所で鉛筆と紙を手にしたら、〈半身を水に漬かりて斜めなるベッドの上のつっぱなき祖母〉など、十数首があふれ出てきました。不思議な感覚でした。書かれたものを見て、自分はこういう光景を目にしたのかと気づいたほどです。しばらくの間は推敲もできず、ただからだから生まれるものを書き留めました。おかしな言い方ですが、直そうとしても歌が「だめ」と言うからです。10年たってようやく意思を歌に反映できるようになりました。でもやはりからだで感じないことは詠めません。

震災後、新聞の短歌投稿欄にはいわゆる〈震災詠〉が膨大に寄せられました。それも、「襲う」「のむ」「さらう」など、津波を擬人化した動詞を使う歌が圧倒的に多かった。みなさんテレビやネットで繰り返し流れる衝撃的な映像を目にして、共通のイメージを抱いたのでしょう。東日本大震災は、個人がスマホで撮影した鮮やかな動画がSNSなどを通して一気に拡散し、長期にわたって視聴できる初の災害となりました。

震災詠は似かよった歌ばかりという批判もありますが、私はそれでもよいと思います。むしろ、示し合わせたわけでもないのに映像に触発されて似た言葉が大量に出てくること自体、とても興味深いと思います。民俗学的な分析ができるのではないかと考えています。

必要な誰かに響く

よく「災害を後世に伝える」と言いますが、歌を、主義や理念を伝えるための手段にはしたくないと、常に「注意」して詠んできました。それでも、災害の一つ一つの場面の描写は、確実にそのときの様子や人の思いを伝えます。短歌とはそういうものだと思いますし、私も過去の災害の歌から、そのように受け取ってきました。

3月11日以降に生まれた震災詠の群れを、数十年後の地点から眺めたらどんな景色が見えるのでしょう。結果的に、その人の人生において必要なときに過去の歌を受け止め、何かを感じてくれればいいと思います。そう考えれば、私の歌も後の誰かの心情に響くことがあるだろうし、響いてくれたら嬉しいと思います。

梶原さい子／1971年宮城県気仙沼市生まれ。歌人。「塔短歌会」選者。『短歌の口語化がもたらしたもの 歌の「印象」からの考察』で第29回現代短歌評論賞、第三歌集『リアス／椿』（砂子屋書房）で第11回葛原妙子賞、平成26年度宮城県芸術選奨を受賞。ほか、歌集に『ナラティブ』（砂子屋書房）、共著に『3653日目〈塔短歌会・東北〉震災詠の記録』（荒蝦夷）などがある。朝日新聞みちのく歌壇選者。

文学

私たち個人が紡ぐ物語の受け皿としての仙台短編文学賞

仙台短編文学賞 事務局長 ㈱プレスアート 川元 茂

第6回仙台短編文学賞の選考委員は詩人・和合亮一さん。
400字詰め原稿用紙で25～35枚程度の短編が対象。2022年11月15日締切、2023年3月発表。

被災地から文学を立ち上げるために

仙台短編文学賞は、2010年に「なぜ仙台に文学賞はないのか？」という問いからはじまりました。在仙の編集者数名で構想し、協議を重ね、2011年3月10日に第一回選考委員を依頼した佐伯一麦さんを交えて4月発表を決定。奇しくもそれは東日本大震災の前日でした。翌日、大震災が発災。仙台短編文学賞は一旦封印され、各社の再起が優先という判断で無期限延期となりました。ただ私たち編集者は、生業（なりわい）である出版を通して、被災地に赴き、対話を続け、災後の言葉を記録していました。動き続け、言葉を書き連ねることで、私たちの街を襲った未曾有の災害の輪郭を描こうとしていたのかもしれません。そんな日々の中で出会ったのが、佐伯一麦さんの「震災のときの子どもたちが成長して文学的な言葉を持ったときに、はじめて被災地から文学が立ち上がってくるのではないか」という言葉でした。仙台の名を冠した文学賞をつくることで、私たちの心の裡を言葉にし、風化に抗うことはできないだろうか、この文学賞が個々人の思いを受け入れる器になり得るのではないか、そんな思いが生まれました。2017年、河北新報社も加えて、私たちは仙台短編文学賞を再起動しました。

小説で災厄を語り継ぐことの可能性

賞の規定は「仙台・宮城・東北となんらかの関わりがある未発表作品」という点だけです。決して震災だけをテーマにした賞ではありません。ただ私たちの日常の地続きに震災がある以上、受賞作品にも応募作品にも震災は影を落とします。それは発災から11年が過ぎた今でも変わりはありません。第4回選考委員のいとうせいこうさんが評した「（仙台短編文学賞は）大震災をどう語り継ぐかという社会的な問題にも鮮やかな答えを与えていたように感じる」という指摘は、この文学賞が震災を経験した私たち個人の物語を映しだす鏡になっていることの表れです。過去5回の応募総数は2000編超。中央のメディアが発する紋切型の物語ではなく、私たちが見聞きし、沈殿し、熟成を重ね、それでも書かなくてはならなかった物語を発表する場になっているのではないでしょうか。「あの日」からの体験や思索を虚実を交えて物語る小説（フィクション）という表現方法はこれからも選択されていくはずです。それが震災を文学で語り継ぐことの可能性であると思うのです。

仙台短編文学賞／仙台の出版社「荒蝦夷」「プレスアート」、河北新報社の3社からなる実行委員会が主催。これまで、佐伯一麦さん、熊谷達也さん、柳美里さん、いとうせいこうさん、玄侑宗久さんが選考委員を務めている。
https://sendaitanpenbungak.wixsite.com/award

collaborated with せんだいタウン情報 machico

vol. 02

machico（マチコ）防災部といっしょ

今回のテーマ

未来へつなぐ中高生語り部

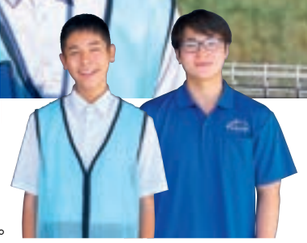
震災から月日が経ち、
当時を覚えていない・知らない世代も増えてきました。
その一方で、次世代による伝承の取り組みが各地で行われています。
今回は、machico防災部と学生団体COLORweb学生編集部が、
「中高生語り部」に案内してもらいながら
『気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館』を見学しました。

COLORweb学生編集部は、学生目線で仙台・宮城の情報を発信する学生団体です

＼聞いてみた人／

machico防災部員 ぷりぱん　COLORweb学生編集部 ことっちょ

＼教えてくれた人／



中高生語り部
階上（はしかみ）中学校1年 芳賀世剛さん　気仙沼向洋高校2年 鈴木朔弥さん

machico編集部（以下ⓜ）： 震災当時は何歳でしたか？

鈴木さん（以下 鈴）： 5歳でしたが、津波の光景は今も覚えています。

芳賀さん（以下 芳）： 僕は1歳でした。

ⓜ 当時まだ小さかった2人が語り部活動を始めたきっかけを教えてください。

鈴： 中学に入って、周りの友達が活動を始めたことがきっかけでした。でも今は、震災を知らない世代にも伝えたいという思いでこの活動をしています。現在、この施設では約80人の中高生が語り部として活動しています。

芳： 僕は今日が語り部デビューなんです。これまで研修会で当時の状況を学んだり、大人の語り部から話を聞いたりして準備してきました。祖父も語り部で、震災の話を聞く機会は多かったんです。

COLORweb（以下ⓒ）： 活動をする上で大切にしていることはありますか？

鈴： 大まかな台本はありますが、どこを強調して伝えるかはそれぞれが考えています。地震に限らず全国でたくさんの自然災害が起きています。僕がいちばん伝えたいのは「逃げることの大切さ」です。命を守るために、まずは逃げる。言葉も大切ですが、ここで遺構を見て、それを感じてほしいと思います。

ⓒ 言葉だけでなく、被災物を見て感じられることもありますね。現役中高生の2人が考える「中高生語り部」の意義は何ですか？

鈴： 戦争体験を語れる方が減っているように、震災の経験も語れる人がいなくなるかもしれません。でも、未来のためにも語り継ぐ必要があります。僕たちが語り部として活動することで、少しでも長く震災のことを伝えていけると思います。

芳： 語り部は震災について詳しく伝えられる重要な存在だと思います。災害はいつどこで起きるか分からないものです。もしもの備えや気付きにつながってほしいです。

鈴： 僕たちの活動が、いつか誰かの命を助けることにつながるかもしれない。そんな思いでこれからも語り部を続けていきたいと思います。

WHAT'S
machico防災部とは

仙台・宮城の人とまちを元気にする地域コミュニティサイト
「せんだいタウン情報machico」の編集部員が、
防災・減災に役立つスキルを体験して発信する「部活動」です。

machicoから＼アーカイブが見られます！／

machico防災部 & COLOR web学生編集部が見学してみた！

今回は、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で
毎月3.11の月命日付近の休日に開催されている「みんな語り部」に参加。
中高生語り部の皆さんが館内を案内してくれます。

＼皆さんをご案内します／

震災遺構の中へ
震災遺構「気仙沼向洋高校旧校舎」の中へ。床も天井も流されたそう。

保健室（1F）
ベッドや毛布が残る保健室の床には、津波堆積物の砂や泥も。

散らばっている教科書は当時使われていたものです

通信実習室（4F）
津波の最高到達点は南校舎の4F。津波の跡が残っています。

電気磁気室（3F）
大津波によって教室へ流れ着いた車がそのまま残されています。

屋上
屋上からは水平線が見え、海の近さを実感。気仙沼湾横断橋も望むことができます。

気仙沼の復興が感じられる、僕の好きな景色です

この木は"生き証人"だと思っています

中庭
ここには津波を被ってもなお成長する木が。

現在は新校舎になり、制服も変わりました

北校舎（1F）
廊下に並ぶのは震災前の学校生活の写真。

折り重なった車
屋上から降りて外へ。引き波の通り道となった校舎裏には何台もの車が。

見学の所要時間は約1時間～1時間半。展示や遺構の内容はもちろんのこと、中高生語り部の2人が、ここで起きた出来事を理解し、自分の言葉で伝えてくれたことで、「未来に向けて何をすべきか」を考えるきっかけになりました。

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館
DATA 宮城県気仙沼市波路上瀬向9-1 ☎0226-28-9671 [4月～9月]9:30～17:00（受付は16:00まで）［10月～3月]9:30～16:00（受付は15:00まで）休月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12/30～1/4）¥一般 600円 / 高校生 400円 / 小中学生300円 https://www.kesennuma-memorial.jp/about/

レポート

◎ 次世代が知り、伝えることが未来を守る

◎ 聞いたことを他の人にも伝えて、みんなが語り部に

◎ 言葉と残されたもの、それぞれの伝承を

じぶんごとワーク

3・11のような大災害がもし自分の身に起こったら、どんな対応が必要でしょうか？あの日を経験した人の声を参考に、普段から備えておきたいもの・ことを考えてみましょう。

撮影したり
切り取ったりして
ご活用ください

みんなの体験を読んでみよう

あの日を振り返ることばから、災害に備えるヒントを探しましょう。

3.11を経験したみんなのことば

40代女性
「津波の被害を受け、携帯も繋がらず、家族5人が集合できたのは2日後。毎年3月11日に集合場所と、通ってはいけないルートを確認しています」

50代男性
「当時は食料を調理する熱源に困りました。近所でけやきの枝を拾って、料理していました」

70代女性
「避難所で配給の手伝いをしていましたが、冷たいアルファ米に、2人でペットボトル1本など食料の少なさにびっくり。備えの大切さを感じました」

40代男性
「近くの実家に避難しました。水道が使えなかったため、数十年ぶりに井戸を開けて水をくみ、トイレ用に使いました」

50代女性
「ラジオの情報が頼りでしたが、近所の情報がわかりませんでした。同じマンションの高校生が給水場所やお店の情報を自転車で周って調べ、紙で貼りだしてくれました」

30代女性
「子どものストレスに気を使いました。避難所で知らない人と一緒に過ごしてお互いストレスを溜めるくらいならと、自宅にとどまりました」

40代女性
「震災当時、出張中の家族に安否を伝えようと災害用伝言ダイヤル（171）にメッセージを残したら、家族だけではなく親戚や知人たちも聞いていました」

20代男性
「ガソリンがないと聞き、宮城に住む祖父母の家へ届けに行きました。今思うと、自宅の車を2台とも、十分に給油していたからこそできたことだと思います」

あの日の経験を動画で知ろう

東日本震災を体験した人と、現在同じ境遇の人の対話を動画でも紹介しています。
当時と今、それぞれの視点で、自分と大切なひと・もの・ことを守るためにすべきことを考えてみましょう。

石巻市立病院の震災当時の事務部次長×現在の事務部次長

震災当時、妊娠していた方×今、妊娠している方

こちらより
ご覧いただけます

災害時の連絡手段・避難先を確認しておこう

いざというときに、身近な人と連絡がとれるようにしておきましょう。
避難先や経路も前もって調べ、共有しておくと安心です。

書いてインプット

災害時の緊急連絡先をメモしよう

保護者や家族など		遠方の親戚や知人など	
氏名	TEL	氏名	TEL
氏名	TEL	氏名	TEL

災害用伝言ダイヤル（171）の使い方

自分の名前と今いる場所、向かう場所などをはっきり伝えましょう。

伝言を残す場合：171にダイヤル ▶ 1をプッシュし録音 ▶ 自宅の電話番号などを入力（※市外局番から） ▶ 伝言を入れる（30秒）

伝言を聞く場合：171にダイヤル ▶ 2をプッシュし再生 ▶ 自宅の電話番号などを入力（※市外局番から） ▶ 伝言を聞く（30秒）

災害用伝言板の使い方

伝言情報を文字で登録できます。国内外から内容の確認と追加が可能。

携帯電話・PHSから下記URLへアクセス
https://www.web171.jp/
▶ 自宅の電話番号など（※市外局番から）
▶ 伝言を登録するときは 登録 をクリック
▶ 伝言を確認するときは 確認 をクリック

書いてインプット

避難先を調べておこう

地震の場合	津波の場合
土砂災害の場合	洪水の場合

ハザードマップを活用しよう

災害発生時に危険性が高いエリアや避難所を示したハザードマップ。右記サイトの「わがまちハザードマップ」で各災害時の避難経路や避難所をあらかじめ確認しておきましょう。

国土交通省
ハザードマップポータルサイト
https://disapotal.gsi.go.jp

Vol.2

きて in 岩沼市・山元町 みて

宮城県の各地にある震災関連施設をご紹介します。今回は、県南沿岸部において津波による浸水範囲が大きかった岩沼市と山元町。「問い」の「答え」は、ぜひ現地に行って探してみてください。

※答えは県HPにも掲載。詳しくはP14をご覧ください。

施設❶

キーワード □環境を知る □まちを感じる □祈りを捧げる □避難を考える □防災を考える

岩沼市千年希望の丘交流センター

千年先の未来と笑顔のために育て続けていく減災のかたち

岩沼市の沿岸部約10㎞に渡って整備された6つの公園と防災盛土を含む14基の避難丘。その総称が「千年希望の丘」です。ここは祈りの場であり、防災・減災の要でもあります。丘をつなぐ園路の樹々は、全国のボランティアが植樹したもの。十数年後には森となり、津波の威力を弱める「緑の堤防」へと育ちます。地域の交流拠点でもある交流センターを中心とした広大なメモリアルパークをめぐりながら、未来のための防災を体感してみては。

シンボルでもある慰霊碑。その高さはここを襲った津波と同じ8メートルで、中心の鐘には「鎮魂・記憶・希望」の3つの意味が込められている。

園路には常緑広葉樹などの樹木が植えられており、現在も植樹・育樹活動が続いている。樹々の成長が感じられ、来るたびに異なる景色を見ることができる。

東日本大震災当時の津波浸水域よりも高く設計された避難丘には、非常用のテントやソーラー照明など、一時避難場所としての機能が備えられている。

最も海に近い「1号丘」には、海岸線と貞山堀、かつてこの地域にあった6つの地区の位置関係が示されたモニュメントと日時計があり、街並みの変化を実感。

問 避難丘をつくる材料の9割に、震災で発生した〝あるもの〟が使われています。その材料とは何でしょう。

答

DATA 宮城県岩沼市下野郷字浜177 ☎0223-23-8577 9:00～17:00 休火曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12/26～1/7） ¥無料（ただし、交流スペースを貸切にて使用の場合は有料） https://sennen-kibouno-oka.com/

交流センター内には、岩沼市の復興のあゆみを知ることができる年表パネルや植樹活動等の写真が多数展示されている。

備蓄倉庫では災害用毛布や非常食などの備蓄品をローリングストック。有事の際にはここから町内の施設へ配布される。※備蓄倉庫の見学は要事前予約

2011年3月21日に開局し、2017年3月をもって閉局した山元町臨時災害FM放送局「りんごラジオ」の一部放送プログラムを手回しラジオで聞くことができる。実際にラジオを通して聞くことで、災害時の情報の重要性を体感するきっかけに。

施設❷

キーワード □データで知る □情報の重要性にふれる □避難を考える □防災を考える

山元町防災拠点・山下地域交流センター（つばめの杜ひだまりホール）

地域の声が集まって生まれた拠点 全国の防災拠点のロールモデルへ

山元町は津波によって総面積の約37％が浸水しました。それは当時想定していた範囲を大きく超えるものでした。震災後に建設されたこの施設は、有事に備えたさまざまな工夫・対策が施されており、防災拠点のロールモデルとなっています。1Fの防災情報コーナーは誰でも自由に見学できるオープンな空間。地元臨時災害FM放送の活動など、山元町の震災当時の様子を知ることができるほか、震災の教訓を活かした防災に関する取組を学ぶことができます。

山元町の被害状況や震災後にあった支援、震災後に新たに完成した施設などをパネルで展示。当時を振り返るだけではなく、あの日をきっかけに前に進む町の様子を知ることができる。

問 災害が起こった時に施設の中に避難できるよう、建物の外側にある工夫がされています。その工夫とは何でしょう。

答

町内各地の景観を、震災前、震災後、現在の3つの時系列の写真で伝える。津波被害の大きさをあらためて実感できる。

図書コーナーやホールなどが併設された「交流拠点」でもあるこの施設。防災に関する知識をわかりやすく伝えるパネルも多く展示されており、くらしの中で防災を意識させる構成。

DATA 宮城県亘理郡山元町つばめの杜1-8 ☎0223-37-5592 9:00～21:30 休年末年始（12/28～1/4）※都合により臨時休館となることがあります ¥無料 https://www.town.yamamoto.miyagi.jp/soshiki/20/8035.html

宮城県

岩沼市～山元町沿岸部

きてみてマップ

まっすぐ続く海岸線に面するエリア。
ひつじとふれあえるいわぬまひつじ村や、
震災後に再建された八重垣神社など、
新しい見どころも。

ひとやすみスポット

1 鳥の海ふれあい市場

「きずなぱーとわたり」1階の産直施設。新鮮な海産物や農産物などが揃います。秋には郷土料理の「はらこめし」も販売。

DATA 宮城県亘理郡亘理町荒浜字築港通り6-22 ☎0223-35-2228 9:00～17:00 休年始のみ

2 山元夢ファーム

ポニー、ヤギとふれあえる牧場。大人はもちろん、小さな子どもでも安心して乗馬やエサやりなどの体験が楽しめます。

DATA 宮城県亘理郡山元町山寺北泥沼112 ☎0223-36-8309 10:00～16:00（乗馬受付は15:30まで） 休土・日・祝日・長期連休 ※平日は予約または事前連絡で可

3 やまもと夢いちごの郷

いちごをはじめとする山元町の農水産物や特産品、加工品が豊富に揃う直売所。季節の果物のジェラートも味わえます。

DATA 宮城県亘理郡山元町坂元字荒井183-1 ☎0223-38-1888 〈直売所〉9:30～17:00〈フードコート〉11:00～19:00 休年末年始（12/31～1/2）

宮城県の主な震災伝承施設

沿岸部でも、内陸でも、
様々な震災体験がありました。
数多くの記録と、その街の魅力に
ぜひ触れてみてください。

こちらからアクセス

宮城県復興支援・伝承課ホームページ

ホームページはこちらからアクセス

https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/densho/index.html

復興関連の情報や、
みやぎ東日本大震災津波伝承館で行われるイベント等の
告知を行っているページです。
「きて・みて」に掲載している各伝承施設の「問い」の
答えもこちらに掲載予定。ぜひご覧ください。

SNS
「いまを発信！復興みやぎ」
も更新中！
Facebook Twitter Instagram
@fukkomiyagi

INFORMATION

ぼうさいキッズパーク 日時：11月23日㈷ 【要予約・入場無料】

ご家庭での「防災のきっかけづくり」のために、
お子さんはもちろんのこと大人にも楽しみながら学んでいただけるプログラムを実施します。

❶11:00～12:00「ガラクタでわかる!?"地震のおこりかた実験"」東北大学災害科学国際研究所准教授 福島洋 氏
❷13:00～14:00「建物ってなんで揺れるの?」東北大学災害科学国際研究所准教授 榎田竜太 氏

会場：みやぎ東日本大震災津波伝承館 石巻市南浜町2丁目1-56　定員：各回20名
申込先：みやぎ東日本大震災津波伝承館　☎0225-98-8081　miyagi-denshokan@pref.miyagi.lg.jp

詳しくはこちら！

当時図書館だった部屋には、周辺地域のジオラマや被災前の校舎の模型が展示されている。校舎の模型からは、その構造や立地があの日の結果につながっていたという事実を俯瞰して見ることができる。

問 展示室の校舎の模型を囲うアクリルの高さは、中浜小学校に到達した津波の高さを表しています。同じ目線で見て、感じたことを書き出してみましょう。

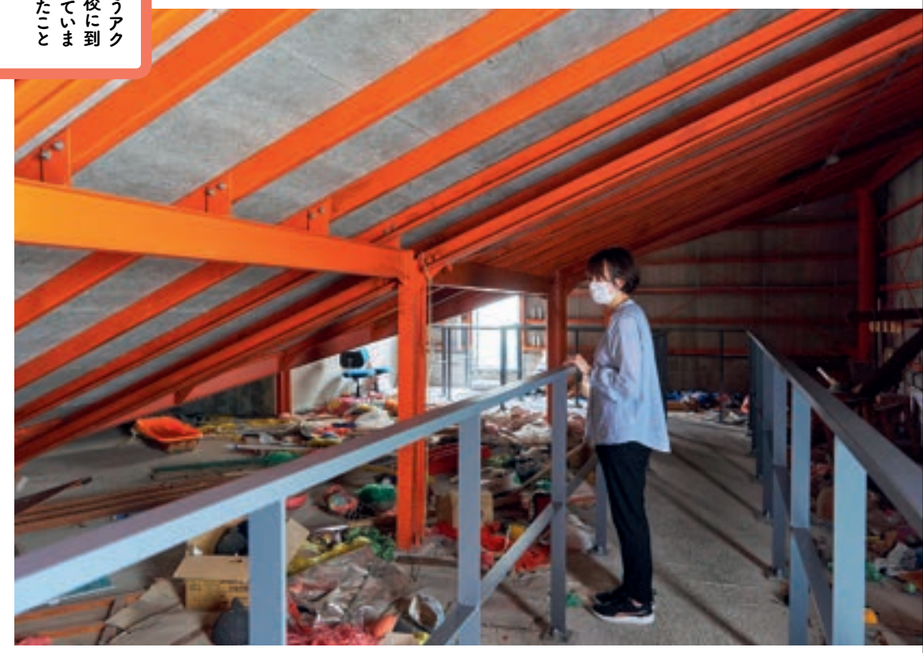
答

施設❸ キーワード □津波被害を知る □避難の様子を知る □避難を考える □防災を考える □祈りを捧げる □地域とのつながりを考える

山元町震災遺構 中浜小学校

偶然の重なりで多くの命を救った校舎をもしもに備えるきっかけに

津波が校舎2階の天井まで迫った危機的な状況の中、児童と教職員、保護者ら90人全員の命を守り抜いた震災遺構です。これはただの奇跡ではなく、地域とのつながりと日常的な防災意識、学校全体の構造、3月9日に発生した前震の経験、たまたま見つかった災害用毛布…いくつもの偶然が重なった結果でした。校舎に残る大津波の痕跡と懸命な避難の記録には、これから起こりうる災害に備え、何ができるかを考えるヒントが詰まっています。



津波の危険から逃れた後、児童たちが一夜を過ごした屋根裏倉庫。運動会や学芸会で使った段ボールなどを床に敷き、波が引いた後の体育館から偶然見つかった災害用毛布にくるまり、寒さと余震に耐えた。

窓ガラスや壁がほとんど流された中庭。上空に張られたネットは津波の高さを示しており、あらためてその威力を実感するとともに、波に飲まれた校舎の中にいるような感覚に。

DATA 宮城県亘理郡山元町坂元字久根22-2 ☎0223-23-1171 9:30～16:30（最終入館16:00） 休月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12/28～1/4） ¥大人400円、高校生300円、小・中学生200円（団体料金あり）
https://www.town.yamamoto.miyagi.jp/soshiki/20/8051.html

校舎に設置された外階段は、いざという時に避難できるよう誰でも入れる仕組みになっており、中浜地区・磯地区の防災拠点の役割を果たしていた。

全国からの支援への感謝のメッセージが書かれた黄色いハンカチ。このハンカチが掲げられている場所は元々墓地で、この土地に眠る人々への鎮魂の想いも込められている。

校舎の一部が吹き抜けだったために、多くのがれきが多目的ホールへ。堤防から流れ着いたクロマツの根は横に広がっており、地面に深く根付いていないこと＝海岸防災林としての機能が低かったことが分かる。

あしたのクリエイティブ

vol.02

せんだい3・11メモリアル交流館のハンドブック

『海辺のふるさと ―仙台市東部沿岸地域の歴史と記憶』

まちの変化を図版で俯瞰し見比べて楽しむ

「せんだい3・11メモリアル交流館」は仙台市地下鉄東西線の荒井駅構内にあり、東日本大震災を知り学ぶための場であるとともに、津波の被害を受けた仙台市東部沿岸地域への玄関口として、この地域の歴史や文化を伝えています。

『海辺のふるさと』は発災から10年目となる前年、コロナ禍で臨時休館を余儀なくされた最中に、この地域について伝える・知るツールを市民に手渡していくことはできないかという職員のアイデアから企画されました。執筆を担当したのは、元仙台市博物館市史編さん室長である菅野正道さん。以前この施設で歴史講座をしていた縁もあり、一緒に制作がスタートしました。

このハンドブックは、高砂・七郷・六郷地域の昔の絵図や地図、写真などの図版がたくさん使われています。各集落の江戸時代の絵図、明治時代の地図、震災前の航空写真、現在（令和元年）の航空写真が並べられ、地域の歴史を俯瞰できるつくり。制作に携わった職員・三條 望さんは「歴史家による視点から沿岸部について深く掘り下げた内容はもちろん、歴史にあまり詳しくないという方でも、この図版を眺めて変化を見つけるという楽しみ方ができます」とその特長を語ります。

ハンドブック『海辺のふるさと―仙台市東部沿岸地域の歴史と記憶』800円（税込）　執筆：菅野正道　発行・販売場所：せんだい3.11メモリアル交流館。

積み重ねられた歴史に気づき地域への愛着へ

制作において、菅野さんとともに仙台市東部沿岸地域を歩き、その歴史や人々の暮らしの跡にも触れたという三條さん。それぞれの土地の背景に「時間の層」を感じるようになったとのこと。「菅野さんと沿岸部のいろいろな石碑を巡り、それらのユニークな特徴や由来を教えていただいたことで、地域で大切な歴史や物語が今も残っているんだという実感がありました。一つひとつの集落ごとに、積み重ねてきた暮らしがある。その、それぞれの〝色〟が見えてきて、新しい気づきがたくさんありました」。

ハンドブックでは、なかの伝承の丘や、震災遺構仙台市立荒浜小学校、藤塚の五柱神社など、沿岸部で現在訪れることができるスポットを紹介しています。冊子を片手に現地を訪れると、かつてのその場所の音や声が聞こえてくるようです。

この施設では、「リーディング・ライブ」という地域に伝わる民話や物語をプロの役者と音楽家が演じる朗読劇を行うなど、地域文化や震災体験の伝承を特色のある形で行っています。まずは地域に関心を持ち、愛着を持つこと。それが、ふるさとを未来に繋いでいくことにつながるのではないでしょうか。

Baton

発行元

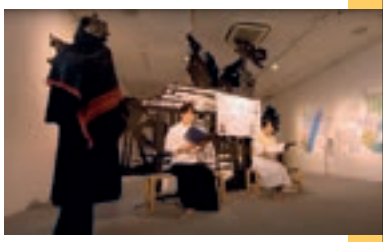
宮城県震災復興本部
（事務局：復興支援・伝承課）

〒980-8570
宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号
TEL：022-211-2443
FAX：022-263-9636

宮城県 Miyagi Prefectural Government　むすび丸

企画展『Voice』で上演したリーディング・ライブは、2022年10月7日からの『Voice映像展』にて館内で視聴できるほか、YouTubeでも配信。上記のQRコードからアクセスを。
せんだい3.11メモリアル交流館 ◉宮城県仙台市若林区荒井字沓形85-4（地下鉄東西線荒井駅舎内）☎022-390-9022 ◷10:00～17:00 休毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）、祝日の翌日（土・日曜日、祝日を除く）、年末年始、臨時休館日 https://sendai311-memorial.jp/

＼こちらから視聴できます／



リーディング・ライブの様子。六郷地域編、七郷地域編、高砂地域編と3日に分けて上演。舞台俳優と演奏（マリンバ、横笛、チェロ）による朗読劇は、今後も公演の機会を検討中。